

国立民族学博物館の収蔵品 64

首長人形の軌跡



写真1 アメリカ展示場の「パチャママの門」
(標本資料番号H0210691)

首長人形はペルーを代表する民芸品である。と言うと、この国には首の長い民族がいるような印象を受ける人がいるかもしれないが、今も昔もそうだった人びとは存在しない。国立民族学博物館のアメリカ展示場の「パチャママの門」という祭壇は、アンデスの農村風景と世界観を描いた作品だが、そこに飾られる聖人や天使はどれも首が長い姿をしている。

この首が長いスタイルの人形が誕生したのは二十世紀半ば。ペルー南部のクスコ出身のとある聖像職人が考案したものである。着想源は、アンデスのラクダ科動物にある。クスコの民芸工房が集まる街の一角ではかつて、リヤマを用いて農産物などを運んでくる牧民や商人たちの交易が盛んにおこなわれていた。日々、その光景を目にするなかで、職人の頭のなかに、アンデスを象徴する動物であるリヤマやアルパカに似せて、人形の首を長くするという考えが芽生えたのだ。キリスト教の聖像づくりに、アンデス独自の趣向を取り入れた、当時としてはきわめて斬新な発想であった。

ところが、首の長い姿の聖人や聖母の像は当初、地元の人びとのあいだでは、珍奇なものとして、手にする者はほとんどいなかった。それどころか、同業の職人たちからも、その作風は異端視されるほどだった。



写真2 聖母の首長人形
(標本資料番号 H0210693)

だが、一九五〇年代半ば、首長人形に大きな転機が訪れる。その存在が、文豪ホセ・マリア・アルゲダスの目にとまったのだ。アルゲダスといえば、先住民の擁護と復権を掲げるインディヘニスモの思想の持ち主として名高い人物である。ちょうどその頃、新生のペルー文化博物館の民族学研究所を任されていたこともあり、地方へ出かけて行っでは国内各地の民衆文化の発掘や収集に熱を注いでいた。クスコを訪問したアルゲダスは、この職人の首長人形を買い占めたうえ、リマでの展示会を企画した。これがきっかけで、アンデスの首長人形は、首都でも知られるようになる。同時に、知識人のあいだでペルーを代表する芸術のひとつとして評価されたのだった。その後、数々の栄えある賞が、首長人形の創始者に授けられ、その独創的な作風は今では国内外で知られるところとなっている。

現在、アンデスの民衆芸術（ポピュラー・アート）またはフォーク・アートと呼ばれるものの中には、首長人形のように、二十世紀半ばに日の目をみるようになったものが少なくない。そこには、ペルーの社会的文化的かつ政治的な背景があったことは想像に難くない。アメリカ展示場に飾られているアンデスの箱型祭壇もまさに同じ道を辿った「同士」である。
(八木百合子)